奈良女子大学
文学部
なら学プロジェクト
PRESENTS

続・続・大学的奈良ガイド

第11講 風景をめぐる見立ての系譜

「南都八景」を手掛かりに

講師　内田忠賢（奈良女子大学教授）

日本には、特別な風景を三景、八景と、とらえる伝統がある。そして、ある風景を他所の風景になぞらえる、見立ての伝統もある。

（著者近影）
札　幌 YOSAKOI ソーラン祭りを調査中（というか、毎年、出場しています）

■南都八景を手掛かりに

以前、奈良女子大の公開講座で、来て下さった方々に「南都八景」（左表）について尋ねたことがある。皆さん、歴史好きが多かったせいか、南都八景は聞いたことがあるという。だが、八つの風景すべての伝承地を知る人はいなかった。とくに「轟橋」と「雲井坂」が分からない。いずれも、現在の奈良県庁の東側。間近に「轟橋」と「雲井坂」の小さな石碑が建っている。室町時代が起源といわれる南都八景は狭い範囲に、その伝承地が散らばっている。

表　南都八景

①	猿沢池の「月」
②	春日野の「鹿」
③	東大寺の「鐘」
④	三笠山の「雪」
⑤	轟橋の「行人」
⑥	南円堂の「藤」
⑦	雲井坂の「雨」
⑧	佐保川の「蛍」

でも、場所が何処だったかは、どうでもよい。注目すべきは八景という、風景のとらえ方だ。琵琶湖周辺の8つの美しい風景を総称し、近江八景と呼ぶことは知られる。横浜の金沢八景、茨城の水戸八景…いずれも、中国江南（揚子江・下流域）の瀟湘八景を範としている。瀟湘八景では「夜雨」「晩鐘」「落雁」「晴嵐」「帰帆」「夕照」「秋月」「暮雪」という情景を風景と結びつけて、8カ所を選び出した。日本のほとんどの八景は、多少のバリエーションはあるものの、それを見習っている。

一方、松島、天橋立、宮島の「日本三景」も、よく知られた風景のとらえ方だ。このように、情緒的な風景のとらえ方、「八景」や「三景」というとらえ方は、江戸時代にたいそう流行した。現在でも、日本三大夜景、日本三大がっかり名所という風景の数え方は人気があり、しかも日本独特ともいわれる。香港、ナポリ、函館の夜景を、世界三大夜景と名付けるのは日本人だけで、イタリア人は、そんな風景のとらえ方をしない。

志賀重昂『日本風景論』

■風景的ナショナリズムと自然美

科学主義が重宝される明治時代に入ると、情緒的に風景美を愛でることは減り、ダイナミックな自然美を賞賛する風景のとらえ方が重要になる。ベストセラーとなった志賀重昂（しげたかし）（1863～1927）の著作『日本風景論』（初版1894年）が代表だろう。志賀によれば、自然が作り出した、世界に誇るべき多様な自然美が日本中にたくさんあるという。そして、欧米の自然美に対抗しうる、日本の自然美こそ賞賛されるべきだという。欧米列強に伍し、脱亜入欧を目指す時代の雰囲気が後押しした。この時代、日本アルプス、日本ライン、日本各地に見出される○○富士…壮大なスケールの見立てが流行する。この状況を見た文学者、小島烏水（うすい）（1873～1948）は「従来の近江八景や日本三景式のごとき古典的風景美は一蹴された感がある」と驚いたほどだ。

昭和2年（1927）に、東京日日新聞社と大阪毎日新聞社という東西の二大新聞が主催した「新日本八景」というメディアイベントでは、日本中から、9300万通の郵便投票があったという。彼らが投票した風景の上位はいずれも、「山岳」「渓谷」「瀑布」「温泉」「湖沼」「河川」「海岸」「平原」などダイナミックな自然美だった。ほぼ同時期、新聞社が読者投票により選んだ「日本二十五勝」や「日本百景」も自然美ばかり。もはや、南都八景風のしっとりとした情緒はない。

■見立ての系譜

とはいえ、ヨーロッパの風景になぞらえた日本アルプス、日本ラインという見立ては、実は、南都八景のそれとも、つながる。風景の借用、転用と呼んでもよいかもしれない。○○銀座、小京都、○○の軽井沢、○○の芦屋（私が住む学園前は「奈良の芦屋」と呼ばれるらしい）…商業が盛んだった戦前の米子（鳥取県）が「山陰の大阪」と呼ばれたこと、北海道では比較的暖かい道南の伊達が最近、「北海道の湘南」と名付けられたことなど、風景の見立ての系譜は脈々と続く。

〈講師紹介〉
内田忠賢　うちだ ただよし。三重県生まれ。奈良女子大学教授、学長補佐。専門は地理学・民俗学、大衆文化論。編著書に『風景の事典』（古今書院）、『都市の生活』（吉川弘文館）、『都市民俗生活誌（全３巻）』（明石書店）、『都市民俗 基本論文集（全４巻）』（岩田書院）、翻訳書に『風景の図像学』（地人書院）など。
ひとこと：実家は三重、学生時代は京都、勤務大学は京都、高知、東京、奈良と転々。地理学者なので、転勤は結構楽しみ（家族には迷惑）。北海道か東北にも住んでみたい…。